

台湾研修での学び

短期大学部 こども学科 3年

私がこの研修に参加した理由は二つある。一つ目は、自分の知らない文化や景色を、自分の目で見て感じたい思いがあったからだ。何度か海外に行く計画はしていたが、実習が続くなど、なかなか実行することが出来なかった。二つ目は、海外の保育や教育について興味があり、様々な国の子どもたちと関わりたい思いがあったからだ。説明会で、幼稚園や小学校に行き、自分たちで考えた授業を行うことが出来るとわかり、研修に行くことを決意した。

オリエンテーションで仲間と話し合い、台湾の子どもたちに行う授業を考えた。ただ楽しい時間を過ごしに行くわけではなく、子どもたちや先生方にとっても、私たちにとっても忘れられない時間にしたいと感じた。そこで私は、対象年齢を考えて、日本のことを楽しく伝えることをテーマにした。私の授業案に仲間も賛成してくれて、二日目の立人国際幼稚園では、けん玉製作、三日目の建安国民幼稚園で、さくらの木製作、小学校では万華鏡製作を行うことに決まった。訪れたことがない場所で行うことに不安を感じながらも一生懸命に準備をして、私がしっかりと指揮をとれるようにイメージトレーニングを何度も重ねた。また、授業を通して学びたいことを考えていた。一つ目は、研修に参加した理由にもあるように、台湾の保育・教育についてである。先生方の子どもへの関わり方や施設についてよく観察した。二つ目は、母国語が異なる中で、どのようにして子どもと関わることになるかについてである。三つ目は、日本と台湾の子どもの違いである。子どもの様子に関してはもちろん、台湾の子ども、インターナショナルスクールに通う子どもはどんな絵を描くのか興味を持った。そのため、けん玉製作の際には絵を描くことをメインとするために、あえてシールの数を減らし、キャラクターものは無くして、雪だるまや日本の電車など、日本ならではのシールだけにした。また、子どもが絵を描き終えてからシールを貼る時間にすると工夫をした。

2日目も3日目も到着してからは、私の心の中は驚きで溢れていた。大きな建物と厳重な警備、子どもが伸び伸びと体を動かして、複数のスポーツを同時に行える敷地の大きさとスポーツ用品の数、種類だった。私が見る限り、座り込んでつまらなさそうにしている子どもは見当たらなかった。元気よくいきいきと楽しんでいた。子どもが主体的に活動を行えるようにするためには、選択の自由の幅を広げることと選択ができる環境づくりが大切だと感じた。私は、沢山子どもたちと交流した。言葉がわからなくて話しかけることが怖いと感じることはなく、夢が叶っていることに幸せを感じ、子どもがかわいいことと楽しいことに夢中だった。簡単な単語とジェスチャーで意思疎通をすることが出来て、自分が想像していた以上に困ることはなかった。けん玉製作では、私が描いたうさぎ柄のけん玉を見本として説明すると、子どもたちはオリジナルのウサギと、それぞれ好きなものを自由に描いていた。私の担当していた女の子はピンクと紫色が大好きで、男の子は力強い

色使いをしていた。その男の子は日本に住んでいたことがあり、日本語も台湾語も理解して話すことが出来ていた。インターナショナルスクールに通っているため、英語も学んでいる。私よりも小さな子どもが母国語以外の言語を話している姿から、環境が人を変えることと環境の大切さを学んだ。ポケモンを描いている子どももいて、日本のキャラクターやアニメの凄さを改めて感じた。また、けん玉に自分の名前をアルファベットで書けている子どもに驚いた。ひとり一人のけん玉が個性豊かで可愛かった。上手くけん玉をすることができない子どももいたため先生がやり方を説明すると、真似をしながら全員が一生懸命に楽しんでくれていた。帰る時に、担当していた日本に住んでいたことがある男の子から、「僕、好き」と私に言ってくれたことがとても嬉しかった。

さくらの木製作では、先生が子どもに関わっている姿が印象に残っている。先生は伝え



たいことがある際に、声が通りにくい中、異年齢の子どもたちの興味を引き付けていた。それは、声の抑揚だと感じた。一定の声量ではなく、変化させ、丁寧に真剣に子どもたちと向き合っていた。その真剣さが伝わっているように、子どもたちはしっかりと先生の日を見ていた。これは信頼関係を築けているということも重要なのだろう。また、先生が声を掛けると子どもたちから合言葉のようなものが聞こえた。クラス全体で一体感を感じた。子どもは先生のその言葉を聞くと、先生に意識が向くのだろう。意識が向いていない子どもがいても、周りの友だちの姿を見て、意識を変えるのではないだろうか。そして、私たちの準備中には、先生がウクレレのような楽器を持って歌をうたいながら子どもたちと廊下を歩いていた。子どもは「じっとして待つ」ということは難しい。保育には、先生のように臨機応変に対応する力が必要だと改めて感じた。私は全体を見て進める重大な役割だったため、不安と緊張があったが、さくらの木が完成したときには、一生懸命に指揮をとって、今まで頑張ってきて良かったと思えるほどに感動した。

さくらの木製作をした後に、すぐに小学生たちと会い、万華鏡製作をした。図工を集中的に学んでいる学校と聞いていたため、この製作を考えた。小学生に見えないほどに集中力が強く、自分の納得がいくまで挑戦し、時間内に完成させていた。また、わからないことがあっても諦めたり、すぐに先生を呼ぶことはせずに自分たちで協力しあっている姿が印象的だった。給食時間も一緒に過ごして感じたことは、英語力が強いことだ。台湾の子どもたちにとって英語は身近な存在なのではないかと考えた。日本に何度も行ったことがあるよと声を掛けてくれる子どもがいたり、私たちが来ることを知って日本語を勉強して

くれていた子どもがいたりした。「この子が話したいけど恥ずかしいって照れてる」と友だちを連れてきてくれる子どももいた。沢山の子どもに囲まれて食べた給食が、とても幸せに感じた。先生方も子どもたちも、私たちを明るく笑顔で歓迎してくれた。台湾に行く前は、日本のことをどう思っているのだろうと考える時間もあったため、安心と嬉しさと胸が一杯になった。

私が立人国際幼稚園と建安国民小学校・幼稚園の子どもたちと過ごして、共通して感じたことは、集中力と切り替えの強さ、主体的、一体感だった。それは上述のとおり、施設や環境、子どもに対しての先生の関わり方からなるものなのではないだろうか。

保育・教育現場の他にも、故宮博物院や夜市、龍山寺などと様々な場所に行き、色々なことに挑戦をした。試着をしたいことをお願いして一人で洋服を買ったり、足つぼマッサージ中にはおすすめのパイナップルケーキを聞いたりした。日本語が通じない場所で話しかけるといふ勇気が、自分にとって大きな経験に繋がったと感じる。

私がこの研修で日本との生活の違いについて驚いたことは、三つある。一つ目は、交通機関で飲食が禁止されていることである。乗っているときはもちろん、駅のホームでも禁止されており、違反したら罰金がある。意識して気を付けていたが、日本よりも気温が高いことや移動も多く、何度かペットボトルを出しそうになってしまったことがあり、冷や汗をかいた。ホームで並んで待っているときに、女性が飲み物を飲んでいるところを駅員の方に見つかった場面を目撃した。罰金はされていなかったが、身が引き締まるくらい怖かった。二つ目は、トイレでトイレットペーパーを流せる環境が少なく、ごみ箱に捨てていることである。また、個室にトイレットペーパーが必ずあるというわけでもなかった。観光地では環境が整っていることもあったが、宿泊したホテルの部屋では、ごみ箱に捨てていた。三つ目は、バイクの数が多くあることである。自動車や自転車よりも多かった。ガイドの方に、台湾人は1人2台所有していることが多いと教えていただいた。道端には日本という自転車の感覚で沢山のバイクが駐車されていた。また、そのバイクは一車線に何台も並んで信号待ちをするため、大きな交差点に出ると日本では見られないようなバイクの光景に圧倒された。

私はこの研修を通して、報告書には書き納められないほどの学びを得た。台湾に行くためにパスポートを取得し、入国検査を受けて約5時間飛行機に乗り、機内食を食べる。未知の世界が広がっていて胸が高まった。朝から夜まで全てが刺激的な5日間を過ごした。私の過ごす日常が全てではない、当たり前ではないということ、よく聞く言葉だが、世界は広いということを実感することが出来た。参加した理由にもあるように、自分の知らない文化や景色を自分の目で見て感じることに、保育・教育現場に行き子どもたちと関わるという夢を叶えた。一生忘れられない経験をすることが出来た。この研修を通して出会えた他学科他学年の仲間と北翔大学の先生方、台湾の先生方と子どもたち、関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。